


 ずいそう

## 万年筆にもビタミンC

高津知司



今、万年筆が付録の雑誌、万年筆専門誌の充実など万年筆が静かなブームであると耳にしました。私の世代では、コマーシャルソング、流行語等の思い出があります。当時は万年筆が大人へのパスポートであり、憧れの文房具でした。皆さんにも万年筆に関する思い出はありませんか？

私と万年筆との最初の出会いは、学習雑誌の付録でした。そのときの万年筆はすぐに使い物にならなくなったことを覚えています。次の出会いは、高校入学祝いです。この万年筆は、ニブ（ペン先のこと）が細字で細かな文字が書きやすく、時々ペンクリニックでオーバーホールしていただき、今でも第一線で使っています。三度目の出会いは、私が公園事務所に就任するときです。予定価を書くために、松本清張、柴田錬三郎、北方謙三、開高健と多くの文豪も愛用したといわれる最高峰モデルを購入しました（自分へのご褒美でもありました）。勿論、今でも愛用しています。ペンクリニックの紹介をしますが、これはペンメーカー、輸入協会、大手文具店等が年数回開催するイベントで、店頭やHPで告知されます。ペンクリニックで万年筆を自分用に調整してもらおうと、格段に書きやすくなります。また、好みのインクを調合してもらえる人気イベントもあります。

ここで、万年筆の分類について少しおさらいしてみたいと思います。ニブの太さによる分類からです。ニブは細字（EF、F、MF等）、中字（M）、太字（B、OB等）、ミュージック、カリグラフと数多くあります。日本製のペンは画数の多い漢字を書くために、輸入品に比べて同じ太さ表記でも少し細目です。ニブの材質による分類は、スチールと金で、14Kのように金含有量でさらに分類されます。金ニブの先端部分は硬いイリジウム合金ですが本体はしなやかなので、あの独特な書き味が生まれます。次はインクの補充方法による分類で、カートリッジ式と吸引式に分けられます。カートリッジ式にコンバーターを取り付け吸引式で使える両用と呼ばれるタイプが、今は主流です。吸引式もピストン方式をはじめ多種存在します。吸引方式や両用の良いところは、多種多様のインクが使えるところです。カートリッジにはヨーロッパ規格があり輸入品の間ではある程度の互換性はありますが、国内の主要メーカーは独自規格で互換性はありません。

次に、万年筆で重要なインクについてもおさらいし

ておきます。インクは大きく分けて、古典系、染料系そして顔料系に分類されます。昔はあの錆びた鉄の臭いがする古典系インクが主流でした。このインクは無色透明で、溶けている酸化鉄がさらに酸化することで黒く変色します。透明なインクでは書き辛いので適量のブルーの染料系インクを混ぜています。このため、書いた時はブルーで時間がたつと黒に変色し、ブルーブラックと呼ばれるようになりました。現在では、青系と黒の染料インクを混合したブルーブラックが主流になったので、古典ブルーブラックとも呼ばれています。古典系は強い酸性なので、ニブに金が使われるようになったと言われていています。このインクは安価なスチールニブのペンには推奨されない、中で固まると分解対応になる等の理由で、現在では数種類しか販売されていません。一方、染料系インクは水溶性で扱いやすく、多彩な色が混合できるので近年主流になっています。また、顔料系インクは墨のようなインクで、ペンの中で固まると分解対応になるため倦厭されていましたが、粒子が非常に細かいインクが発売され、保存性や筆記性が良いので人気が出ています。

古典系のインクは、こまめなメンテナンスの必要性が唯一の欠点と思っています。しかし、アスコルビン酸で洗浄すればペンの中の固形物（滓）を容易に溶かすことができることが雑誌で取り上げられたため、古典系インクも扱いやすくなりました。そのためか、大手文具店で輸入の古典系インクを目にするようになりました。また、自ら調合した古典系インクを配布する方も現れました。ところで、アスコルビン酸という名前から特殊な薬品のように聞こえますが、「ビタミンC」のことです。粉末が使いやすく、薬局に行けば簡単に入手できます。万年筆にもビタミンCが有効です。

皆さんも、机の引き出しに眠っている、古典インクを使ってたであらう思い出の万年筆を発掘してください。そして、ビタミンCを溶かして作った洗浄液（私は水100ccに1gの溶液を使用）に一晩入浴させ滓（疲れ）をとってやって、現役復帰させてください（ただし、自己責任でお願いします）。万年筆はメンテナンスを欠かさなければ何十年も使用可能で、使えば使うほど手に馴染み手放させない筆記具になると思います。